

双葉にだるまランド

製造全工程の見学、体験

28年春の開所目指す

江戸時代から続く新春の恒例行事「双葉町ダルマ市」で知られる同町にだるまの製造販売、観光体験が一体となった施設が整備される。町の縁起物「双葉ダルマ」の製造を手がける白河だるま総本舗（白河市）が設立した新会社「だるまランド」が運営、2028年春の開所を目指す。

造・販売を行うほか、下地 考えた地元の商工団体が総作りや成形、絵付けまで全本舗13代目の渡辺守栄さんての工程を公開、見学・体験できるようにする。総本舗は同市でだるまランドをどが特徴の「ふたば福ダルマ」を制作した。

以来、町の縁起物として双葉ダルマが誕生。総本舗が製造を担い、ダルマ市に出店するJA福島さくら女性部協議会双葉支部ダルマ部会などに納品してきた。

町が原発事故からの復興を目指す中で、七転び八起き縁起物を通してにぎわいづくりに貢献しようと施設の立地を決めた。

町役場で締結式が行われ伊沢史朗町長と、総本舗14代目だるまランドの渡辺高章社長が協定書を交わした。伊沢町長は「双葉ダルマは復興のシンボル。観光交流の新スポットとして交流人口の拡大に期待したい」、渡辺社長は「だるまの持つ挑戦心などの意味合いは双葉町と重なる。縁を大事にして復興に貢献していきたい」と話した。

町と同社が17日、町内の中野地区復興産業拠点への立地協定を結んだ。施設名は「だるまランド双葉（仮称）」で、双葉ダルマの製造で約30年前に町おこしを



双葉ダルマを囲み、町の復興や観光交流人口の拡大に向けた思いを共有した伊沢町長（左）と渡辺社長



▲11月18日 福島民友新聞掲載

「だるまランド双葉（仮称）」は、どのようなことができる施設になりますか？

今の「ふたば福ダルマ」は、どのような縁があり、どのようなデザインがなされましたか？

ダルマの顔には、どのようなことを願い、どのような絵柄が描かれているか、調べてみましょう。